INFORMATION

●チーム・コヤーラ主催

今年は公開講評会です！

「創作人形展」公開講評作品公募！

～それからの人形たち～

2013 年 9 月 24 日（火）～ 9 月 29 日 (日)
会場：NHK ふれあいホールギャラリー

チーム・コヤーラは 2012 年 9 月に初めての公募展を開催しました。
今年は、受賞作家やスタッフの間で注目された作品のその後を追う展覧会を開催したいと思います。同時にゲスト作家の作品や裏方となっているチーム・コヤーラの作家作品も展示いたします。

この展覧会は単に鑑賞するのだけではなく、出品者や参観者が創作人形について考える機会としたいと考えています。
会期中のメインイベントとして「公開講評会」を行います。つきましては、この公開講評会のための t 出品者（6 名）を募集いたします。
展示会場でゲスト作家とチーム・コヤーラが出品者立ち会いのもとで作品を公開講評します。
会場の参観者も交え、自由に意見交換を行う機会を設けたいと思います。
優劣や賞を競うのではなく、それぞれの作品に沿って、人形や創作について皆で考える講評会です。

◎公開講評会　各枠 3 名、合計 6 名　講評作品は期間中展示します。
講評会（講評者　よねやまりゅう氏他　次号発表します。）
第 1 回　9 月 24 日（火）　15：00 ～ 17：00
第 2 回　9 月 29 日（日）　13：00 ～ 15：00

【応募条件】
・2012 年創作人形公募展の受賞者以外の方。会員・非会員は問いません。
・公開講評作品も会期中展示します（委託搬出入あり）。
・公開講評会で応募した枠（第 1 回 or 第 2 回）には、必ず本人が同席すること
・出品料（審査通過した方のみ）　1 点 5000 円（2 点まで可。追加 3000 円）

【選考基準】
　独自性・ユニークさのほか、表現内容と他応募作品とのバランスを見て決定させて頂きます。

【応募方法】〆切　7 月 31 日必着
以下の書類をチーム・コヤーラ事務局まで郵送してください。
・写真
「展示作品の写真（無背景　全体とアップ）」→ 2L サイズ、またはハガキサイズ
・以下を A4 の紙に記載
　応募者名／〒番号と住所／電話番号／ email
　作品タイトル／サイズ／本体構造／素材／展示に関する特記事項
※展示装飾品・備品については、スタンドや椅子、または本体表現の一部である場合を除き、認めません。

　選考はチーム・コヤーラが行い、結果は 8 月 10 日までに全応募者に郵送いたします。

紙上展

小林久仁子
「春のおとずれ」
布、木毛、絹糸　49cm
この時代にやがて来る春を想って。

【講評】
色白の頬に赤く紅をさした女性のうっとりとした表情、花飾り、オーガンジーのような生地を使い、狙いたい雰囲気はわかります。しかし体の動きを出そうとしてるのに、この作者の特有の固さが逆効果になってます。体の動きを徹底追求するか、固さを見直してまとめていくか。それは人形を作っていて何が自分が一番楽しいか、大切なのかをよく考えることによって方向が決まると思います。

●ロシアの人形ワークショップ

ロシアの民族人形「ヴェプスカヤ」

講師　エレナ・リシナ（ウラル創作人形作家協会会長）
ロシアで伝統的に作られてきた女性のためのお守りの布人形を作ってみましょう。はさみも針も使わない、素朴なものです。(できあがりサイズ　7 ～ 10cm)

用意するもの　なし
料金　1500 円（材料費・税込）
開催日：
4 月 5 日（金）15 時～ 16 時
4 月 9 日（火）13 時～ 14 時
会場：FANTANIMA!2013 会場
（JR 東京駅前　丸善丸の内本店 4F ギャラリー）
申込・お問い合わせは羽関オフィスまで
tel 042-395-7547
この他にも FANTANIMA! の会場では様々なワークショップが開かれます！詳細は同封チラシ、公式ウェブサイトで！ http://www.nonc.jp/fantanima/

コヤーラ・クラブ入会条件

入会金なし　年会費：2000 円　（更新時に 2 年分一括払いの方は 3900 円となります。）
年 4 回（1・4・7・10 月）のチーム・コヤーラのニュースレターとＤＭ便が届きます。

お申し込み方法

年会費 2000 円を以下の方法でご送金ください。
［郵便振替］　通信欄に「コヤーラ入会」とお書きください。
送金先　「口座番号」　00140-7-358370　「口座名」　チーム・コヤーラ
＊ご入金が確認できたらチーム・コヤーラよりハガキで受領証と会員証を兼ねたお知らせをお送りし、次の号から「コヤーラ通信」をお送りします。更新時には、有効期限内の最後の号を発行するときに、更新のお知らせを同封いたします。

ＤＭ同封希望の方（発行月から 3 ヶ月の間に展覧会を予定されている方）

事前に枚数などお問い合わせの上お申し込みください。同封ＤＭは発行月の前月 20 日にチーム・コヤーラ必着でお送りください。
同封料金　コヤーラ・クラブ会員：2000 円　一般（非会員）：3000 円

紙上展応募の方

会員の方の人形の自作品の写真を受け付けております。
14 号〆切　2013 年 6 月 10 日（必着）
以下を下記まで、郵送かメールでお送りください。
作品写真 2~3 点（全体・アップ・裸形）　サイズ：ハガキ大。
「会員番号」「作家名」「タイトル」「素材」「サイズ」他、簡単なコメントなど。
＊何点でも応募できますが、誌面の都合上掲載はお一人 1 点になります。
＊応募作品はウェブ上で公開されることもあります。（講評は紙面のみ掲載）
＊応募書類は返却いたしません。

個人情報について

頂いた個人情報はチーム・コヤーラの業務委託を受ける HAZEKI office が厳重に管理します。
名簿はチーム・コヤーラのニュースレター発送に使用させていただく他、チーム・コヤーラの趣旨に沿ってＤＭクラブ会員にとって有意義と判断した情報を伝達する以外には一切使用せず、チーム・コヤーラ以外の第三者が閲覧、使用することは一切ありません。

各お申し込み・連絡先

チーム・コヤーラ
東京都東村山市久米川町 3-27-57 HAZEKI office 内
TEL 042-395-7547（担当　ハゼキ）
FAX 042-395-7975
URL http://www.ab.auone-net.jp/~koyaala/
Email team_koyaala@yahoo.co.jp

KOYAALA 通信　編集責任者　羽関チエコ (HAZEKI office)
©KOYAALA TSUSHIN 2010, printed in Japan　本紙記載の記事・写真の無断使用・転載を禁じます。

KOYAALA 通信 No.13
Apr.1 2013
「KOYAALA 通信」は、チーム・コヤーラがコヤーラ・クラブ会員に発行するニュース・レターです。年 4 回発行　発行日（予定）　1 月 1 日、4 月 1 日、 7 月 1 日､10 月 1 日

死と造形

東日本大震災から 2 年。被災地で人々が直面したはずの大量の死。しかし日本のほとんどの人々は、その現実から遮断された日常を暮らしている。あの大惨事の後、人のかたちを表現する人にとってどのような影響があったのかという問いを茫漠と持ち続けている。この問いを、アンダーグラウンドの表現を追求してきた作家、よねやまりゅうさんに尋ねてみた。

―よねやまさんは、若い頃米軍の横田基地でベトナムで戦死した兵士の遺体を洗うお仕事をされていたと聞きました。東日本大震災では、被災地の方は大量の死が現実としてつきつけられたと思いますが、被災地以外の無事だった私たちと、経験の違いは大きいと思います。

「日本は報道で遺体の映像を消してるよね。それは何故かわからないけど。現地の人は親族の死とか臭いとか、目の当たりにそのすごさを味わっているわけだよね。配慮があってのことだろうけど、俺は自然のまま見せた方がいいと思うけどね」

―大震災は日本人の死生観に影響を与えると思いました。創作人形でも死を扱う表現がよく見られるので、何か変化が出てくるかと思ったのですが、現状では特にそういうものは感じません。

「タナトスとか、そういうものを扱うことが自分のテ―マとして思っている人もいるんじゃないのかな。俺もタブーやアンダーグラウンドは好きだから、その感じは分かるけどね。美術学校に行ってる頃は医大の解剖学室に通ったり、結構デスマスクをとりにいったりしたこともある」

―よねやまさんは遺体と接したことで、人の形をつくるときに何か影響ありましたか？

「人形をつくることに関しては、影響ないよ。俺は人形というより、ボーカーソンの自動人形とか、機械に皮膚をかぶせて人間のように動かすとどうなるかとか、そういうところから興味をもったというのはあるよね。生き人形みたいに、人間を再現すること。腐っていくものなら、腐らせないで再現する。だから、死体を腐食させないエンバーミングやプラスティネーションの技術とか、興味がある。俺は骨もコレクションしてるけど、単に金で買って絵を描くだけではなくて、路上で夏場とかカラスが落っこちてると埋めたりすぐ骨にしたりするから、臭いとか分かるわけ。人間なんて腐ると本当に酷いらしい。俺が死体洗いしたときも結構臭ってたけど、それより酷いはず」

―骨は天野可淡さんも好きだったと聞きますが。

「でも可淡はコレクターじゃないよ。あいつが面白いのは、一回しか見てないけど、自分が大事にしてた鳥の骨を人形のなかに練り込んで作ったんだよ。魂を入れるのか弔いなのかよくわからないけど。そういう意識、彼女特有のものがあったと思うよ。俺は可淡の国立の人形教室を手伝ったことがあるけど、彼女もイカレたところがあった。やっぱり面白いものを作る人間ってそういうところがある。可淡はある意味、原点だと思うけど、その後はイカレたいという願望は感じてもイカレてない作家をよく見るね。彼らは死とか死体を美しいと思ってるかもな。そこには臭いがないからな」

―よねやまさんは骨に対するアプローチが違う？

「違う。でも何故好きかと言われると困っちゃうけど､俺もちっちゃいときから頭蓋骨が好きで、子供の頃から欲しい欲しいと言ってて さ、お袋が『私が死んだらあげる』と言ったら『あんたの頭は形が悪いからいらない』と言ったのは覚えているんだよ（笑）」

―タブー好きの人が実際の惨状を見た後では、タブーっぽいものを作るでしょうか。

「作るでしょうね、やっぱり。河鍋暁斎とか、異常な好奇心が強い人だったんだろうけど、川に流れてきた生首を持って家に帰って絵を描いてたら親父がそんなもの捨ててこいと。昔は生活が死と

白いワックスドールは初期の作品。天野可淡生前、渋谷パルコで開かれた人形展で、可淡作品と並んで展示された。

アトリエには、骨のコレクションや、過去の作品が所狭しと置かれている。FRP の美しい造形と仕上げは氏の得意とする表現だが、素材はワックス、ビスク、粘土を問わない。

背中合わせなんだよな。だからそのことに違和感を感じることは何もなかったんだろう。俺の子供の頃だって、公園で首つり自殺とかあったし、浜に打ち上げられた死体とか見ている。今でも一番記憶に残っているのは、踏切でよく事故があったんだけど、そういう人を運んだ血の付いた土板が、朝起きたら俺の部屋の外にたてかけてあったの！　それはものすごいショックで、何日かその部屋にはいられないと思った。逆に死体を見るより、そういう想像力を引き出すものがあるほうが怖い。昔はそういうことがいっぱいあったよね。俺、血を見ると倒れちゃうんだ（笑）」

—それでよく骨を作ったり、遺体を扱うアルバイトがよくできましたね。

「俺はそういうときは、モード切り替えるから大丈夫。でも流れる血を見るのはダメなんだよ」

—死と隣り合わせというのは、今の東北の人達もそうなんでしょうね‥‥。カンボジアで訪れたキリングフィールドでも、掘り返しきれない遺体から出た歯や布の切れ端が足下の至る所にありましたから。

「日本も外国も、昔は死体が日常的に見られたんだろうけど、今の時代はあらゆるものを浄化しているよね。
タナトスがもてはやされるのは、ひとつ思うのは、今の若者が平和で物足りなくてタブーを求めているのかもしれない。今の若い子は外に出ようとせずに、マニアックな世界で生きているでしょ。女の子の人形作家にはエロスよりタナトスを表現したいと思っている子たちがいる。男の子もフィギュアの世界を求めていて、とてもマニアック。羽関さんは世界の状況を見てきていると思うけど、日本の人形は特殊でしょ？それはどうして？」

—日本の人形は技術も素晴らしいけど、表現に死の部分が含まれていると思います。命を感じるときにそれを守ってほしいという思いから作られた物体が人形というか‥‥、祈りの人形は逆説的に死の概念があるんです。それから、タブーということでいえば、人間ってのぞき見趣味があると思うんだけど、その先は影、闇、夜というべき秘密の世界。今は、その世界との境目がないというか、情報社会のおかげで結界がなくなってきたんですかね。

「俺なんかは持って生まれた変なものがあるから、変なものが好きでさ。やっぱりアンダーグラウンドって好きなんだからしょうがないじゃない、としか言えないよ。タブーの状況じゃないと見られないものがある。でも、はき違えてはいけない。メンタルなものをきちんともっていないと、ただ形とか流行とか、安易なものを追うだけになってしまう。そのために何が必要かというと、死を感じるなら、腐った臭いを感じろっていうこと」

—直接的にタナトスを表現するのは安易で陳腐だと思います。

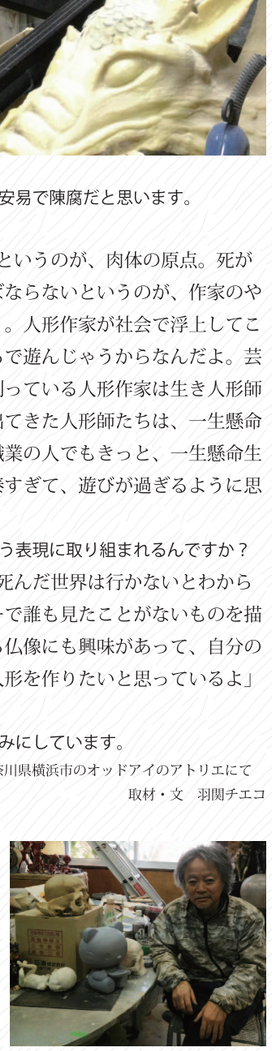
「現実問題として死んだら終わりというのが、肉体の原点。死がどういうものかを表現しなければならないというのが、作家のやらなければならないことだと思う。人形作家が社会で浮上してこないというのは、そういうところで遊んじゃうからなんだよ。芸術家は命を削っているよ。命を削っている人形作家は生き人形師たちにはいたと思う。熊本から出てきた人形師たちは、一生懸命だった。江戸の人達は、どんな職業の人でもきっと、一生懸命生きていたと思う。今の時代は安泰すぎて、遊びが過ぎるように思う」
—よねやまさんは、これからどういう表現に取り組まれるんですか？
「俺は黄泉の国の絵を描きたい。死んだ世界は行かないとわからないけど、俺は俺のファンタジーで誰も見たことがないものを描きたいと思ってる。かなり前から仏像にも興味があって、自分のなかで仏像を現代的に変換した人形を作りたいと思っているよ」

—そのお仕事を拝見できるのを楽しみにしています。

2013 年 3 月 11 日　神奈川県横浜市のオッドアイのアトリエにて

取材・文　羽関チエコ

よねやまりゅう
1975 年　創形美術学校（造形科）中退。
1977 年　フリーで博物館、遊園地、ディスプレイなど造型関係の仕事に入る。1990 年　美術造形工房・有限会社オッドアイを設立。
1982 年にクレヴォーグ第 1 回創作人形コンクールで次席。人形・造形作家として活動。
「球体関節人形展」（2004 年　東京都現代美術館）、アートフェア東京（2008 年）ほか、数々のイベント、展覧会に出品



REPORT チャリティー創作人形展実行委員会

2 月 19 日～ 24 日開催　偕楽園公園センター（茨城）

東日本大震災では、茨城県の被害も甚大でした。「今までに体験した事がない地震津波、自然の脅威を目の当たりにして心が沈み言葉もありませんでした」という県在住の知神けい子さんは、チャリティー創作人形展を思い立ち、人形制作者の仲間や教室生徒 20 名に呼びかけて、開催を実現しました。

とにかく来場者が作品を見て、ひと時でも心が和み笑顔がこぼれる展示会にしたいという願いから、一つ一つの作品を丁寧に、こだわり抜いて制作していくことを心がけたそうです。

全体テーマは設けず、来場者が先入観無しに人形との対話を楽めるようにとの思いから、タイトルも置かなかったそうです。その思いが届き、会場では来場者が人形のタイトルをつけて、出品者と和やかな会話が生まれました。

6 日の開催期間中に 1670 人の来場者があり、会場に置かれた募金箱には 22 万円を超える寄付金が集まりました。これは主催者の予想を上回り、被災地を思う人々の気持ちの強さを改めて感じさせるものでした。その出品者と来場者の充実した交流のきっかけをもたらしたのは、創作人形という各作品の魅力でしょう。

この展示を成功裡に終え、知神さん始め主催者・出品者の方々にとっても、日本の未来に希望を感じる嬉しい人形展となったそうです。

写真上　小山田麗子　下　会場風景（手前：知神けい子さん）

DABIDA デイ　選考経過

前号でご紹介したオランダ・ベルギーの作家の協会 DABIDA による 2013 年ハニー・サリス賞のノミネート作品が選ばれました。DABIDA 作家メンバーの審査による得票の上位 3 名から 4 月 21 日に開催される DABIDA デーで、ハニー・サリス賞が決まります。
写真はその候補の一人 Dorote Zaukaite。
今年のテーマは「joy（喜び）」。DABIDA のウェブサイト上で上位 10 名の作品が見られるほか、最終発表も行われます。　www.dabida.eu
今回は日本人からも 3 点応募があったそうですが、残念ながら選外だったそうです。審査ポイントは「いかにテーマにあっているか」「クオリティ」「独自性」「ユーモア」。
来年も今回同様、公募が行われます。テーマは「変容 (transformation)」です。
詳細は DABIDA のウェブサイトで発表されます。

ファンタニマ！2013
ロシアの TEDDY FUN がやってくる！
不思議可愛いワンダーランド

FANTANIMA!

●東京展
2013 年 4 月 3 日（水）～ 4 月 9 日（火）
丸の内オアゾ　丸善本店 4 F ギャラリー　入場料　無料

●関西展　（下記 3 会場で外国人選抜作品を各 20 点展示予定）
2013 年 4 月 15 日（月）～ 4 月 22 日（月）
京都：昔人形青山／ K1 ドヲル、大阪・珈琲 / 書肆アラビク、乙女屋 SALON

主催　羽関オフィス /TEDDY FUN/IDAA
企画協力　青の羊　協力　チーム・コヤーラ、ユーラスツァーズ
公式ウェブサイト URL http://www.nonc.jp/fantanima
最新情報は twitter で　https://twitter.com/fantanima

日本人作家 35 名、ロシア・エストニア・ウクライナの作家 55 名の動物作品による一大イベント！楽しいワークショップもあります！

FANTANIMA! のキャラクター「ファニマちゃん」（立川好江作）